

## 山陰海岸ユネスコ世界ジオパーク 再認定審査 現地審査報告書（公開版）

【日程】2017年7月31日（月）～8月2日（水）（審査員7月30日現地入り）

【現地審査員】

中田節也（日本ジオパーク委員会）・橋詰 潤（日本ジオパーク委員会）・和田庫治（室戸）

【主な対応者】（所属）：

中貝宗治（推進協議会長）、浜上勇人・岡本英樹・三崎政直（推進協議会副会長）、松浦幸浩（推進協議会事務局長）、郡山鈴夏（推進協議会ジオパーク専門員）、和多田佳史・川口雅浩・米澤裕治・岡 秀樹・株本輝彦・工藤顕史・竹原周郎・板谷和幸・小山真里（推進協議会事務局）、井口博夫・先山 徹・松原典孝・新名阿津子（学識専門員）、谷本 勇（教育部会長）、木下道則（ガイド部会長）、伊藤 徹（学術部会鳥取分会長）、小林峻大・宮森由美子（保護保全部会員）、河根裕二（鳥取市あおや郷土館）、大川泰広（鳥取県埋蔵文化財センター）、岡田一成（湖山池情報プラザアドバイザー）、山根正司（とっとり観光ガイドセンター）、岸本英夫・安藤和也（海と大地の自然館）、福原陽一郎（いわみガイドクラブ）、中元崇博（立岩美高校）、長谷川浩司（鳥取自然体験塾）、山下明男（浦富シーカヤック協議会）、山崎英治（SEEN）、橋本 悦（とっとり因幡グリーンツーリズム推進協議会）、徳田勇人（鳥取市観光コンベンション協会）、朝野泰昌（朝野家）、岩垣廣一（新温泉町商工観光課）、馬場幸男（道の駅「あまるべ」）、藤原進之助（香美町ジオパーク推進協議会）、小林良斉（香美町ウォーキングネットワーク会議）、岡田政和（板仕野区長）、西村昌樹（うずかの森）、今井ひろこ（たじま海の学校）、藤原 敦・古藤 尚（ジオパークと海の文化館）、能登 克行（北前館）、宮嶋俊夫（竹野振興局）、笠浪幸壽（竹野スタイルジオカヌー）、小崎富士夫（竹野スノーケルセンター）、青山治重（たけの観光協会）、宮崎裕紀（Mother Earth）、小長谷 誠（峰山高校）、吉岡道子・中井貴弘（京丹後市教育委員会）、中江忠宏（まちづくりサポートセンター）、池田香代子（とと屋）、木村嘉充（京丹後市）、引野雅文・小山元孝・斎藤千鶴（京丹後市観光振興課）、長峰 是・土谷久美枝・佐藤寛美・小林洋子・岡崎和生・多田昌義（玄武洞ガイドクラブ）、今津治男・橋本 覚・濱田康子（日和山観光）、古川義秀・金山恭子（海と大地の自然館）、漆原利明・小谷昇一・平尾英輝・村江利津（鳥取砂丘・ジオパーク推進課）、飯野 学・武田紀子・松野洋平（岩美町商工観光課）、岩垣廣一・島田秀則・尾崎孝史（新温泉町商工観光課）、田渕 衛（香美町観光商工課）、小林辰美（豊岡市環境経済部）、仲田直樹・波内祐美子（豊岡市大交流課）、瀧下貴也・増田嘉之（豊岡市地域振興課）、高橋一樹（京都府丹後広域振興局企画振興室）、須崎翔太（京都府環境部自然環境保全課）

【見学地点・行程】

- 1日目：あおや郷土館（概要説明・ヒアリング）＝青谷上寺地遺跡展示館・発掘現場＝夏泊海岸＝湖山池・情報プラザ＝海と大地の自然館・渚交流館＝アルマーレ＝朝野家
- 2日目：朝野屋（自己評価表ヒアリング）＝新温泉町ジオパーク館＝道の駅あまるべ＝香美町ジオパークと海の文化館＝北前館＝竹野ジオカヌー海の家メリ＝郷村断層＝道の駅てんきてんき丹後＝大成古墳＝とと屋（自己評価表ヒアリング）
- 3日目：青の洞窟海上タクシー＝玄武洞＝日和山ガイドセンター＝ホテル金波楼（フィードバック・記者会見）

## 【現地審査のまとめ】

### 1. 前回指摘事項への対応

2013年の前回 JGN 再審査において課題とされた以下の件については概ね改善が認められた。すなわち、

- a) 「ガイドシステム、案内板や解説板などについての改善。モデルコースやガイドシステムの整備が進んでいることを事実として示す必要」についてはガイド部会が発足し、協議会内にガイド部会も加わった。これまでどちらかという地域ごとに展開され、バラバラであったものが一堂に会して話し合う機会ができた。
- b) 「既存エリアと拡大エリアを結ぶストーリーと見学コースの設定が急務」。拡大地域では地形発達と人間の生活環境を結びつけたストーリーができつつあり、日本海拡大後の地形地質発達の点から既存エリアと結んだストーリーができつつある。
- c) 「1種ガイドや2種ガイドがまだいない。早急な育成が必要であり、青谷郷土館の再整備が望まれる。」に関しては、ガイド養成講座に1種と2種が設定され、青谷地区でもガイド養成がなされた。

一方、世界の再審査において指摘された以下の事項にやや改善を試みられたものの、あまり成果があったとは思えない。すなわち、

- a) 「地質学的に正しい知識を持ったガイド育成」については、ジオパーク講座や全国大会への参加を呼びかけることで自己研鑽を積むようになったが、推進協議会が中心となった対策はなされていない。
- b) 「外国人受け入れ体制（特にガイドの外国語対応）」については、4ヶ国語対応のアプリの活用とガイドの英会話研修を提供するようにした。また、ガイドの英会話教室を始めたがその成果はほとんど見えない。
- c) 「山陰・北近畿豊岡自動車道などの交通網の整備」については、協議会としては既に計画のある自動車道の延長の早期整備を働きかけてはいるようであるが即効性は認められない。

### 2. 今回の現地審査報告

#### 1) ジオサイトと保全

前回審査において、エリア西側の青谷地域の拡大により新たなサイトが加わった。そこでは新たに地形や地質だけでなく、弥生時代の集落遺跡が発見され、発掘の様子を展示した資料館が整備されるなど、ジオサイトと文化サイトとの関連がうまく説明されている。また、カヌーや海上タクシーによる海岸から見学できるジオサイトが追加されるなど、新たなジオサイトが発掘・追加されるとともに、これまでのジオサイトを地質サイトと文化サイトとに整理された。また、山陰海岸ジオパークは国立公園エリアを中心にエリアが設定されているため、環境省近

畿地方環境事務所と共同で保護保全に関する協同の活動が複数進められているほか、保護保全に関して環境省が補強したジオサイトなどのデータベースを作成、共有している。

## 2) 教育・研究活動

拠点施設、山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館を始めとして、小学生から高校生までの教育が部分的に活発に行なわれ、教読本が作られたりもしている。リニューアルした新温泉町ジオパーク館は、本ジオパークのアーカイブを有する情報収集施設としての機能や、姉妹提携している世界ジオパークのコーナーを設置するなどの努力は見られるが、まだ情報収集の拠点施設としては貧弱で、本館の持つ機能についてもPR不足である。

教育活動については、鳥取県岩美高校では岩美町のパンフレット作りなどジオパークを題材とした学習が行われ、京丹後市の峰山高校では授業のカリキュラムで防災学習が位置付けられ、小学生をガイドするなど、一部の学校においては活発な活動が行われた。地域の研究活動は、2014年に開設された兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科が地域研究を開始しているほか、推進協議会が研究助成を行うなどの地道な活動が継続している。また、上記のように、山陰道の工事に伴って発見された青谷上寺地遺跡が、ジオパーク内の重要なサイトとして整備された。しかし、山陰海岸ジオパーク全体として、教育・研究活動を将来的にどう展開したいのかについては明瞭な方向性を欠いている印象を受ける。

## 3) 管理組織・運営体制

3市3町3県にまたがり、兵庫県が豊岡市にジオパーク推進協議会事務局を提供し、県職員が事務局長となり、そこに主な市町から事務員を派遣する体制は、日本ジオパークの認定以来取られてきている体制であり、事務局長を含めて事務局員がほぼ2年任期で入れ替わるようになっている。これまで学識専門家は協議会事務局の外からサポートする立場であったが、今年度からは地球科学の専門員1名を雇い始めた。しかし、この10年間にわたって同じ体制が維持されてきた負の効果として、事務局長や事務局員は任期中の与えられた事務局長や地域担当事務局員としての業務を全うしているものの、各地域で見られるミクロな盛り上がり比べて、全体をマクロに統括する能力が不足していることは残念であり、山陰海岸ジオパークを将来的にどう持って行きたいのか方向性が見えない。

松原氏らの学識専門員が中心となり、山陰海岸で推し進めてきたジオパークの草の根的な活動は各所で着実な成果を結んでおり、地域の発展や自負に貢献をしている。しかし、彼らの守備範囲には限界があり、盛り上がった地域同士を連携させ、山陰海岸ジオパーク全体として発展させる仕組みができてない。例えば、地域ツーリズムは各所でそれぞれ独自に発展してきているが、県や市町をまたがる連携は、旅館業などの一部に限られている。

山陰海岸ジオパーク関係者や地域の人々が、協議会事務局を「行政」と捉えていることに代表されるように、推進協議会事務局は引き継がれている事業を職務的にこなす集合体となっているきらいがある。そのため地域で光る活動がありながら、3市3町3県の首長がそれぞれの

思いのままに動く結果が、山陰海岸ジオパーク全体としての連携を欠く残念な結果となっていると考えられる。

#### 4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

山陰海岸ジオパークでは、この間、新たな拠点施設「あおや郷土館」をはじめ、多くの拠点施設が整備された。また、協議会内にガイド部会が立ち上がり、ジオパーク全体にまたがるガイドの連携を図る努力がされ始めた。さらに、1種2種ガイド認定制度の導入や、玄武洞の民間ガイドクラブの自営業開始、ロングトレイルを鳥取県から兵庫県に伸ばす企画立案など、ジオパーク全体として着実な進歩が見られた。さらに、旅館経営者の県をまたがる連携ができるなど良い面も見られている。

しかし、ガイドツアーの結果がモニターされておらず、次のツアーに活かす仕組みがまだ十分でないところが見受けられる。また、ツーリズムに関して、地元と協議会事務局、各市町、観光連盟などとの連携がほとんど行われていない印象を受ける。さらに、京丹後のガイドの説明内容に学術的に正しい情報に基づいていないところが見受けられるなど、ガイドは学術的に正しく分かりやすい解説をするようにしてほしい。

広い山陰海岸ジオパークでは地質サイトや文化サイトなどの掘り起こしが活発に行われている一方で、見所が多すぎて訪問者が迷子になってしまう可能性があり、何を見たら山陰海岸や地球の何が理解できるのかが不明である。全体を俯瞰しながら案内できる仕組みづくりやガイドを育てることが必要であろう。

#### 5) 国際対応

この4年間は学識専門員や国際交流担当の事務局員が中心に主要なジオパークの国際会議に参加している。国際会議の毎年開催に引き続き、2015年には第4回 APGN 会議を主催した。また、レスボス・ユネスコ世界ジオパークと姉妹提携を結び、高校生の派遣交流事業などを積極的に実施している。2016年度にはユネスコ世界ジオパーク審査に3名の研究者を派遣したほか、JGNの国際連携ワーキンググループの事業にも積極的に参画している。ただし、ジオパークの運営の仕方を模索するにも、学識専門員だけでなく、協議会構成員や協議会事務局員が、世界だけでなく日本のジオパークについても学ぶ機会をできるだけ多く持つことが必要であろう。

#### 6) 防災・安全

例えば、峰山高校が丹後地震について学習し、1995年神戸淡路大震災を受けた神戸市長田区の高校生と交流し、その成果を基にして地区の小学生相手に地震防災に関するガイドをするなど、防災に関する優れた活動が始められている。

### 3. 結論

この4年間、山陰海岸ジオパークでは、各地域が活発にジオパークと取り組み、2015年には日本で最初の APGN 大会を開催するなど、世界的にも積極的な活動の展開が見受けられた。各地

域では、旅館関係者やガイドなど、地域の人を中心になって、地域の活性化を考えたジオパークの活動が活発に行われている。特に地域の積極的な取り組みは、学識専門員などが、地域に入って長年の努力を積み重ねた結果とも考えられる。

一方で、APGN の運営時にも構成団体間で齟齬があったように、個々の地域が活発的でありながら、ジオパーク全体や隣の地域との連携を欠いており、世界ジオパークとして持続的な運営形態になっているとは言いがたいものがある。ジオパークの中心となるべき推進協議会事務局やその構成員が、それぞれの与えられた日常的な業務を中心にこなし、ジオパーク全体をどう連携させるか、させたいのかについての対話や、自らが地域に入って住民と対話するなどの活動を行ってきていないように見受けられる。また、全体をまたがる推進協議会においても、山陰海岸ジオパーク全体をどう持って行きたいのか、どう連携して発展させていくかについての対話がなされておらず、このような問題点を意識しながらもその改善策について議論していないように思える。

このような仕組みは、山陰海岸ジオパークが 3 県にまたがるという多数の組織が関わるジオパークであることや、自治体が主導するという日本のジオパークであるからこそ生じる問題でもある。現在の「船頭多くして船山に登る」の状態をできるだけ早く回避し、推進協議会構成員全体の十分な議論の上に解決策を探ることが望ましい。そのためには、例えば、自治体から独立した運営組織を模索するとか、3 県から独立したマネージャー的な人材を発掘・雇用するとか、また、それらができないのであれば各県がローテーションで事務局や事務局長を引き受けるなど、今の体制から脱却が必要な時期に来ていると思われる。

世界審査のたびにジオパークの顔である協議会事務局長が変わっていることは持続的とは判断されない。事務局長や事務局員が 2 年の任期で交代することは、ジオパーク活動の裾野を広めていることには繋がらず、逆に、活動の積み重ねを欠き単純な業務的思考に陥る結果となっている。任期の問題があるのであれば、経験のある元協議会事務局員が再度戻ってきてジオパークを支えるような仕組みがあっても良いであろう。推進協議会や協議会事務局が学識専門員と一緒に山陰海岸ジオパークの活動のあり方を考え続けて欲しい。